



静岡県立  
農林環境専門職大学  
農林環境専門職大学短期大学部

# Agrifore Vision 2030



「**耕土耕心**」

## Agrifore Vision 2030

静岡県は東西の海岸線が長く、また南アルプスから駿河湾までの高低差も大きいという多様な自然環境を備えています。そのような環境にある静岡県では、多彩で高品質な農林産物が生産されています。東西に延びる旧東海道が、長い年月をかけて育んできた歴史や物語も数多く存在しています。

現代は、農林業の担い手の高齢化や廃業、少子化が予想以上に進む一方で、経営の法人化や規模拡大などに見られるように、ニーズが変化し多様化の傾向にあります。そのような中、「高度な実践力」「豊かな創造力」を備えた農林業の現場を支える専門職業人が求められています。各分野の経営体において中核を担い、農山村の環境や景観の保全、食文化や住まい方の文化（伝統文化）の継承などに貢献することが期待され、加えて地域社会のリーダーとなる、加工・流通・販売がわかり経営管理能力を有した人材が求められています。

これらの現状を受け、静岡県では農林業経営体や認定農業者を支える経営者や、後継者となる次世代の農業経営を担う人材育成の強化に向けた取組として、2020年4月、静岡県立農林環境専門職大学、静岡県立農林環境専門職大学短期大学部を設置しました。大学・短期大学部ともに、全国初の公立農林業系専門職大学としてスタートし、2021年度末には短期大学部、2年後の2023年度末には四年制大学が、それぞれ完成年度を迎えました。

さて、本学の前身は、明治33年静岡県に農事試験場が開設され、併設された人材育成制度の発足まで遡ることが出来ます。全国に農事試験場の設置を促す明治政府の国庫補助制度に呼応して、農業技術者・農事改良指導者の育成を開始したことが起源です。それ以降、明治・大正・昭和と農林業を取り巻く時代の変化に合わせて120年の歴史を刻みながら、昭和55年に静岡県立農林短期大学校、平成11年には静岡県立農林大学校と名称を変えながら、静岡県内はもとより県外の農林業界にも、多くのすぐれた卒業生を輩出してきました。

今回策定するAgrifore Vision 2030は、120年の歴史と伝統を引き継いで「耕土耕心」を建学の精神としてスタートします。農林業系専門職大学として新たな歩みを始めた本学が、開学からのスタートアップ期間をどのように進んでいくべきか、5つの骨子（教育、学生支援、研究、地域連携・社会貢献・国際化、大学運営）で専門職大学のビジョンを具体的に示します。また、農と食の連携などを重視した他の大学にはない「オンリーワンの農学系専門職大学」として目指す姿についても示します。開学10年目にあたる2030年度を達成年度に定めここに策定するものです。

2025年3月

## 建学の精神「耕土耕心」

耕土とは耕作する土そのものを示す農業用語であると同時に、土を耕すことを意味します。耕す(cultivate)ことは「土を耕す」ことから派生して「心を耕す」の意もあり、これは、文化(culture)と語源が同じだと言われています。「大地を耕すことは、自らの心を耕すことである」という理念・校訓である「耕土耕心」を建学の精神として引継ぎました。先人が農耕を始めた頃から引き継いできた想いが込められています。

## 校章

校章の策定に際しては、一般の方に加えて専門家から300件の応募がありました。その中から、「学生たちが未来の農林業に明るい光を照らしていく存在となるように」という想いが込められている、中心の一枚の葉が光を放出している状態をイメージした下図に決まりました。

校章に示された二つの渦は、新しい大学に引き継がれた建学の精神「耕土耕心」の耕土と耕心が和して一つの形を作っているようにも見えます。本学で学ぶことが耕心であり、卒業後社会を支える人材になることが耕土であるとも言えます。



## 愛称「アグリフォーレ」

本学が愛される大学でありたいとの思いから、開学に際して静岡県立農林環境専門職大学の愛称を一般公募しました。824件の応募の中から「アグリフォーレ」(Agrifore)が選ばれました。

## オンリーワンの専門職大学 農と食

専門職大学の特徴は「高度な実践力」と「豊かな創造力」の育成と謳われています。2017年に制度化された新しいタイプの大学であり、本学はそこにあって全国初の農林業系の専門職大学です。近年食の外部化・簡便化が進む一方、「農と食」の距離が遠くなり、農業や農村に対する国民の意識・関心は薄れています。これからの日本の、「食」を確かなものとしていくためには、消費者と生産者が一体となって自分たちの課題と捉え、行動変容に繋げていくことが必要です。そのような状況の中、開学に際し二つの目標を掲げました。一つ目は、即戦力となる高度な実践力と豊かな創造力を備えた農林業の現場を支える専門職業人の育成です。二つ目は、経営体において中核を担い、農山村の環境や景観の保全や伝統文化の継承などを習得した、地域社会のリーダーとなる、加工・流通・販売がわかり経営管理能力を有した人材の育成です。

どちらにも共通するのは、「食」です。本学は「農と食」の距離が離れる現状の中、教育の中に、農林畜産物を自ら栽培、飼育する技術に加え、その生産物を加工する実習や演習が大学・短大ともに組み込まれています。また、経営に欠かせないマーケティングに関連する講義や演習も学ぶことができます。つまり、本学は日本の「農と食」を確かなものにしていく素地がカリキュラムに組み込まれている、類まれな専門職大学なのです。

教育では、生産から加工流通・販売に至るプロジェクト研究等が行われています。さらに、学生食堂では、圃場で収穫した野菜・果物や新鮮な卵などがメニューに登場します。給湯器のお茶は学生が栽培し製茶したものです。食堂のテーブル、正面玄関や廊下には学内で育てた花々が彩りを添えています。磐田市やジュビロ磐田と連携した「ジュビロ飯」と称した食事を、地域の方と共に学食で食べることができます。

このように、「農と食」がより身近に感じられ、それらを日常の中で体験し学んでいくことをこれからも推進し、「農と食」の連携を特徴としたオンリーワンの専門職大学として歩んでいきます。

# 1 教育

大学・短大共通ビジョン

## 将来の農林業を支える専門職業人を養成します

静岡県立農林環境専門職大学 生産環境経営学部

### 本学の特色を活かし伸ばすことにより、他に類を見ない 農林業経営の核となる人材を養成する高等教育を推進します

農林業の持続的発展のため、本学では栽培、林業、畜産の各分野の経営体において中核を担い、農山村の地域社会を支える人材を養成します。その教育上の特色として、コース別履修科目と分野横断的な共通履修科目を適切に組み合わせた教育課程や少人数授業、実習・演習を中心とした授業、農林業経営体における臨地実務実習、現場課題をテーマとしたプロジェクト研究、1年次全寮制が挙げられます。これら本学のもつ特色を活かし伸ばすことにより、他に類を見ない農林業系の高等教育を推進します。

#### (1) 農林業経営の核となる人材を養成するための専門職教育の推進

- 「職業専門科目」では、農林業経営に必要な生産技術の知識やスマート農業等の先端技術、経営管理および加工・流通・販売等、幅広い知識・技術の修得に重点を置いた教育を実施します。
- 農山村の地域社会における将来のリーダーに求められる農山村の伝統・文化や、農山村の伝統・文化などの地域資源の活用について、「展開科目」等を通じて学修し、農山村において新たな事業展開を生み出す創造力を養成します。
- 農林業経営体での長期にわたる臨地実務実習（「企業実習」・「経営実習」）および「経営分析演習」により、現場に即した課題探究および情報収集・分析・整理能力を向上させ、実際の経営に即した課題解決力を養成します。
- 4年間の学修の集大成としての「プロジェクト研究」を通じ、農林業経営における実践かつ応用的な能力を総合的に向上させ、分析・整理した結果を表現できる能力を養成します。
- これからの農林業経営に必要となる、数理・データサイエンス教育の充実を図ります。

#### (2) 本大学の特色を活かした教育体制の強化

- 学生からの意見と、地域の農林業経営体から得られる最新の農林業事情や先端技術等の情報を反映させることにより、授業内容の充実を図ります。
- コース別の履修科目と、コース共通の履修科目を適切に組み合わせた教育課程や、臨地実務実習、「経営分析演習」および「プロジェクト研究」の繋がりを意識した指導を通じて、科目間を連動させた総合的な教育の推進を図ります。
- 地域社会および県試験研究機関等の学外試験研究機関との連携を活かして、地域と一体となった人材育成の充実を図ります。

#### (3) きめ細やかで切れ目のない教育の実践

- 現場の課題に柔軟に対応できる実践力を養うため、本学の特色である少人数教育体制を活かし、学生一人ひとりが持つ多様な個性や考え方等に対応したきめ細やかな教育・指導を行います。
- 1～4年次を一貫して担当するクラス担任制と、2年次以降のコース別担当教員により、複数の視点を活かした、切れ目のない教育を実践していきます。

#### (4) 教学マネジメントの推進（短大と共通）

- アセスメントプランを策定し、多面的・総合的な学修成果の評価を実施します。
- PDCA サイクルに基づき、自己点検評価での評価を基に毎年改善していきます。
- ルーブリック評価により評価基準を明確に示し、学修成果を向上させます。
- FD (Faculty Development) と SD (Staff Development) 活動により、教職員の教育能力と教育の質の向上、教育手法の改善に努めます。

### 静岡県立農林環境専門職大学 短期大学部

## 未来の農林業の生産現場を支えるプロフェッショナルとして 即戦力となる人材を養成する国内屈指の短期大学としての教育を行います

農林業の担い手が高齢化、減少している中で、安全・安心な食の供給や農山村の持つ多面的機能を支える人材確保が急務となっています。一方、農林業に関心を持つ若者に対してその魅力を伝え、生産現場のプロフェッショナルを養成し、社会に送り出す教育が求められています。本学では、このような社会的な責務を果たすため、理論と実践を効果的に学ぶことができる他に類のない魅力的な教育を目指します。

#### (1) 農林業の専門知識を有したプロフェッショナルの養成

- 講義、実習・演習を結びつけ、「手法の教授」とどまらない「なぜ?」「何のために?」を伴う実践理論教育と、臨地実務実習「企業実習」により、生産現場で即戦力として活躍するスペシャリストを養成します。
- ICT を活用した農林畜産物のモニタリングや生産記録管理方法、ドローンや無人トラクタの活用等、スマート農業技術（高度化技術）への対応力の向上を目指します。
- 経営の多角化を見据え、「流通加工論」や「マーケティング・販売演習」等の講義、6次産業化や商品開発に関する実習・演習により、生産物の加工・販売等の知識・技術の修得を目指します。
- 地域社会を支える生産者として、農山村の多面的機能、自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承、地域の活性化手法等の理解と、農林業者の心構えを醸成します。

#### (2) クォーター制（4学期制）を活かした教育体制の強化

- 1 年を 4 学期に区切るクォーター制を活かし、効率的に広範囲の学修が可能なカリキュラムを構築します。
- 学修者本位のカリキュラムにより、全ての学生が早期に農林業分野の学修に順応できる教育体制を強化します。
- 全教員が学生の履修状況を把握するとともに、教員間で講義内容の情報共有を行うことで、科目間のつながりが考慮された質の高い授業を実施します。
- 臨地実務実習やプロジェクト研究の充実のため、農林業経営体、静岡県の農林事務所および県農林技術研究所・畜産技術研究所等との学外協力体制の充実を図ります。

#### (3) 多様性への対応と、カリキュラム全体でのジェネリックスキル（社会人基礎力）修得の推進

- 多様な学生に対し、入学時およびコース選択後における担任によるきめ細やかな個別指導と、障害を持つ学生に対し、講義、実習、演習等において合理的配慮を実施します。
- 卒業後は社会人として自立するために、ジェネリックスキルを養成する教育を推進します。

#### (4) 教学マネジメントの推進（大学と共通）

## 2 学生支援

### 学生生活や就職等の支援について 全学一体となって取り組み、学生満足度の向上を図っていきます

入学から卒業後まで、農林業の現場や地域の状況や施策に明るい教職員のサポートが極めて重要です。また、近年は多様な学生が入学してきており、教職員のサポートがより重要となっています。本学では、学生が安心して意欲的に学習に取り組み、専門職業人として社会に送り出せるよう支援します。

#### (1) 社会情勢に合わせたキャリアサポートの強化

- 有用な資格取得の推奨による、学生の強みと自信の強化・推進を図ります。授業等において農林業経営体や企業等で役立つ資格の取得を促進し、学生の就職活動を支援します。
- 学生の希望、特性、専門性を鑑みた進路指導の実施をします。学生の特性に応じたインターンシップや臨地実務実習(企業実習)の調整および進路指導等、担任制に基づく一貫した個人指導を推進します。また、キャリアサポートセンターと連携した学生の進路指導・支援を推進します。
- 卒業生の情報網を構築し、相談・支援を図っていきます。静岡県立農林環境専門職大学同窓会(以下同窓会)組織を強化し、縦と横のネットワークづくりの向上を目指します。また、県農林事務所等との連携によるサポート体制を強化します。

#### (2) 学生生活支援の充実

- 学生と教職員とのコミュニケーションを深め、より充実した学生生活を支援します。学生と教職員のコミュニケーションを深めることで、問題や悩みを早期に把握・対処することで、充実した学生生活を送ることができるよう支援します。
- 多様な学生が学ぶことができる体制整備については、障害学生支援委員会の運営により安心・安全な学生生活を送れる環境を整備します。学修指導を必要とする学生については、教職員が連携して支援します。また、カウンセラーを常時配置し、メンタルケアが必要な学生を支援します。
- 学生自治活動支援、学生寮の舎監の常駐、寮設備、体育館、グラウンドおよび学生談話スペース等の充実を図り、学生満足度の向上に努めます。
- 日本学生支援機構奨学金、給付型奨学金などの奨学金制度を活用し、安心感のある学生生活を送れるよう支援します。

#### (3) 充実した課外活動のサポート

- 学生課と教員の連携により、学生が主体となりサークル活動や大学祭を運営できるよう支援します。また、ボランティア、アルバイトに関する情報の提供を推進します。

## 3 研究

### **農林業の発展に寄与するための 分野横断型・産学官民連携による研究を拡大・推進します**

本学は、農林業分野の高度な職業人を育成する機関として、産業としての農林業の発展に寄与する技術革新、経営改善もしくは技術・社会的問題に対する課題解決型の実践的研究を推進することが必要です。さらに本学には、次世代の農林業の発展に貢献できる専門的指導者の養成という観点が求められます。こうした研究を実施するにあたっては、従来の学問分野の垣根を超えた学際的な研究体制が重要となります。本学所属教員の専門分野や、地域社会との密な連携、県農林技術研究所と隣接する特徴を活かし、文理融合を含む分野横断型・産学官民連携の研究を推進していきます。

#### **(1) 本学の特徴を活かした分野横断型研究の推進**

- 本学には1学部1学科の中に、農業、林業、畜産、経営、民俗、食品といった専門分野を背景とする、様々なキャリアをもつ教員が所属しています。それぞれの教員がもつ特徴を活かし、分野を超えた教員間の学術交流を行うことにより、従来の枠組みにとらわれない技術革新・経営改善につながる研究が可能となります。こうした所属教員間の連携に基づく協働研究により、社会の総合的理解と課題解決に繋げる「実践的な総合知」の創出・活用の推進を目指します。
- 本学は全国初の農林業専門職業人材養成の高等教育機関として、実践知を形式知とする手法など、農林業専門教育方法に関する研究を、学内研究プロジェクト「重点研究」等を活用して推進していきます。
- 独創的・先駆的な研究や教員の研究基礎力の向上のため科研費への取組を推進します。

#### **(2) 産学官民連携等の協力体制の拡大・推進**

- 本学では、臨地実務実習等を通して、地域産業界との連携を進めています。この特徴により、生産現場の課題や研究シーズをいち早く捉え、将来を見据えた技術に結びつく現場課題解決型の研究を推進します。さらにそこで構築される人的交流ネットワークを活かし、情報交換を積極的に行うことに加えて、学外組織との産学官民連携の研究体制を整備・強化します。
- 本学の同一敷地内には県農林技術研究所があります。こうした特徴を活かし、現場に密着した試験研究機関との連携を推進するとともに、他大学・学外試験研究機関等との協力体制を充実させます。
- 産学官民連携の推進や活発な研究活動の実施のためには、競争型資金等の獲得・活用が必要です。本学では公募型外部資金の獲得を積極的に行い、他機関と連携して新しい技術、サービスや製品などの創出や、既存のもの改善による課題解決に向けた研究に取り組んでいきます。

#### **(3) 研究成果の公表や普及の推進**

- 研究で得られた成果については、学会での研究発表や学術雑誌への論文投稿を積極的に行い、また本学の紀要である「アグリフォーレ・レポート」による研究成果等の報告を行っていきます。
- 研究成果は学術的報告のみでなく、共同研究に取り組む組織・機関内で成果を共有するとともに、県・市町・JA等が開催する各種シンポジウムやイベントで成果をPRするほか、大学が主催する「アグリ実践講座」・「アグリフォーレサイエンスカフェ」やSNS等を利用して、時局的・戦略的に一般市民や農林業関係者への研究成果の広報・普及を推進します。

## 4 地域連携・社会貢献・国際化

### 地域や国際社会に貢献する開かれた大学を目指します

地域における農林業の振興や地域社会の持続的な発展など、農林業を通じて地域を支える人材の育成が求められています。また、国際化など時代の要請の変化に対応した質の高い教育および研究を推進することが必要です。このため、本学では地域社会との連携とともに、国際的な視野を兼ね備えた国際化社会と連携する大学づくりを推進します。

#### (1) 地域に開かれた大学としての取り組み

- 大学施設を積極的に開放し地域社会との交流を図るため、実習等で得られた生産物の販売や学食での提供ならびに大学祭等での地域住民との関わりを推進し、地域に開かれた大学を目指します。
- 自治体が主催するイベント等、地域住民の集まる場への参加・出展を通じて、本学の教育や研究の取り組みについての周知を積極的に行います。

#### (2) 地域貢献活動の推進

- 地域の農林業に関わる諸課題について、地域ニーズを汲み取り、新たな商品開発や文化活動などへ学生が積極的に参画し貢献するため、静岡県信用農業協同組合連合会が行う「担い手育成支援事業」や産学官民連携事業等を積極的に活用し、学生が自ら行う調査研究や課外活動などを支援します。
- 大学の教育・研究機能を活用し、その成果を地域に還元するため、全国共済農業協同組合連合会静岡県本部の「JA次世代農業者育成支援事業」や前掲の「担い手育成支援事業」等を推進します。

#### (3) 公開講座やリカレント教育の推進

- 大学の研究成果などを地域に還元する「アグリ実践講座」、「アグリビジネス講座」および「アグリフォーレ サイエンスカフェ」等の公開講座を開催し、大学の教育機能を広く開放します。
- 学び直しのニーズに的確に対応した、体系的で継続的なりカレント教育等、生涯学習の多様な機会の提供を推進します。

#### (4) 企業・市町等との連携の推進

- 地域に根ざした教育・研究機関として、人材の育成や、広く地域社会の課題解決に貢献するため、臨地実務実習における地域の農林業経営体との連携や「磐田市未来の農林業連携懇話会」等における産学官民連携による研究の推進を図ります。
- 多様な教育・研究フィールドを整備するとともに、磐田市財産区や富士市市有林等、県内市町との連携による公有地や施設等の活用を推進します。

#### (5) 海外の高等教育機関等との連携

- 農林業に関わる教育および研究のグローバル化を図るとともに、人材交流により学生および教員の国際感覚を養うことが重要です。このため、インドネシア国立ボゴール農科大学やオランダ Yuvarta (旧ウエラントカレッジ) に加え、その他の海外高等教育機関との連携を推進します。
- 海外からの農林業技術研修生等の受け入れを通じて、本学の教育・研究に対する国際的な理解の促進を図ります。

## 5 大学運営

### 学長のリーダーシップの下、教職員が協働し大学運営に取り組みます

社会の急速な変化と同様に、大学運営の在り方も一層の高度化が求められています。このため学長のリーダーシップの下、教員と職員がチームとして大学運営に取り組む必要があります。日本初の農林業系専門職大学として、ガバナンス体制の継続と透明性を確保していきます。

#### (1) 組織が一体となった戦略的な大学運営

- 学長のリーダーシップの下、全教職員が大学運営に取り組み機能強化と魅力の向上を図ります。
- 人事、内部規程等の制定、カリキュラム編成、学位授与方針、ビジョン・中長期目標の策定などは、教員および職員が主体的に取り組み見直しを行い、大学運営の改善に取り組みます。
- 評議会や教授会、各種委員会や会議での意見交換等では、開かれた議論を通じて、教員および職員が大学の運営方針に係る共通認識を持ち、連携して業務に取り組みます。

#### (2) 自己点検評価に基づく切れ目のない改善

- 「自己点検評価委員会」において、自己点検評価を継続的に実施します。その結果を公表することにより、公立大学として透明性の高い運営や恒常的な改善に努め、開かれた大学づくりを推進します。

#### (3) 教育評価システムの検証と改善による、教職員の資質の向上

- 学生による授業評価や学生アンケートの実施、教員相互の授業参観、優秀教員の表彰、教職員向け研修会など、授業内容・方法の改善を図るための組織的な研修、FD・SD 活動に取り組みます。

#### (4) ジェンダーレス等を踏まえた多様な人材の登用

- 教員採用では、専門性、スキルや知識、業務に対する意欲を評価の重点にするよう配慮し、多様な人材の確保に努めます。また、実務家教員について専門職大学・専門職短期大学設置基準に基づき一定数の確保に努めます。

#### (5) 大学運営のための施設・財政基盤の充実

- 教育研究や執務環境の維持、修繕等に必要予算の確保と、計画的かつ有用な執行に努めます。
- 実習ほ場やハウス、現場教室などの教育研究や執務の環境維持、修繕、整備等を計画的に進めます。

#### (6) 持続的発展に繋がる運営基盤の維持・強化

- 「評議会」「教授会」および学内委員会を中心とした管理運営体制の維持・強化を図るとともに、「教育課程連携協議会」における学外委員からの意見を教育に反映させます。
- 授業内容・方法の改善を図るための組織的な研修、FD・SD 活動に取り組みます。(再掲)
- コンプライアンス意識の向上と徹底、ハラスメントのない教育環境、職場環境づくりを図ります。
- 同窓会との連携を積極的に進めます。

#### (7) 農林業の発展に資する大学運営

- 国や静岡県の農林業政策を踏まえた大学運営を推進します。

#### (8) 特徴ある研究の支援

- 「研究推進委員会」を中心とし、研究水準の向上および研究活動の質の向上と活性化を推進していきます。農林技術研究所・畜産技術研究所との共同研究や機械・機器等の相互利用等を進めていきます。地元自治体やJA等との連携による課題抽出や研究成果が活用できる体制づくりを行います。